JCCニュース No.8　2004年11月4日

ウェイ　ラ　ミン　ティエン
為了明天
明日のために
子どもたちに希望を　人々に友情を
特定非営利活動法人 宋慶齢基金会 日中共同プロジェクト委員会
http://www.sokeirei.org

研修の果実は、やがて中国各地の保育者に伝えられます

上海宋慶齢基金会学前教育代表団が東京・横浜の乳幼児施設を参観、交流

9月12日から18日の7日間、上海宋慶齢基金会副秘書長兼弁公室主任の沈海平さんを団長とし、中国福利会の経営する宋慶齢幼児園・中国福利会託児所・中国福利会幼児園の教師たち各2人計6名を団員とする代表団が来日、研修活動を行いました。JCCは、幼児教育支援交流プロジェクトの一環として協力しました。歓迎夕食会には、黒須隆一八王子市長はじめ90名を超えるご参加を頂きました。どの乳幼児施設関係者も親切に受け入れて下さり、内容の豊な学習をさせていただきました。

安部幼稚園訪問

沈海平団長（左端）と団員の皆さん

沈海平団長から帰国後寄せられたお礼状には「このたびの訪日につきましては、皆様の手厚く周到な準備のおかげで良好な学習環境と条件が備えられ、私達は在日期間全く不安を覚えることなく、至る所で家庭的な温かさを感受しました。沢山の有益な知識を学び、多くの真摯な友人と交わり、日本人民の中国人民に対する深く熱い思いを体験し、中日両国人民の友誼が天長地久であること、中日両国人民が世々代々友好でなければならないことを心から会得しました。」とありました。

日本の幼稚園・保育園は代表団に何を語りかけたのか？

明星大学教授
諏訪 きぬ

何を伝えたら……？

宋慶齢基金会日中共同プロジェクト委員会が上海宋慶齢基金会学前教育代表団を迎えるに当たって、もっとも懸案となったのは、「中国の幼児教育・保育関係者が日本の保育・幼児教育から何を学びたいか」であった。2002年12月に完成した中国福利会幼児園は「1万m²の敷地にホテルのような立派な建物を配した施設完備の園で驚いた」と7月に上海を訪れた会員の方々から聞かされていた。また中国宋慶齢基金会は、アメリカやオーストラリア、イギリスなど西欧諸国とは交流を持っているが、日本への代表団ははじめてという。その代表団に、わが国の保育・幼児教育から何を伝えればよいのだろうか。

オーソドックスに幼稚園・保育園の歴史を辿る

視察先のコーディネイトを任されたとき、咄嗟にひらめいたことは「日本の幼稚園・保育園の歴史を辿ってみよう」ということであった。幸い東京には、わが国で第1号の国立幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園（1876年創設、現在のお茶の水女子大學附属幼稚園）や1900年に野口幽香等が創設した二葉幼稚園がある。貧児幼稚園から内務省管轄の保育園に転換したが、今も二葉保育園として健在である。さらに女子高等教育の発展を願った成瀬仁蔵が創立した日本女子大学には附属幼稚園がある。いずれも明治期に創設され、脈々とその伝統を紡ぎ、今も保育界・幼児教育界にインパクトをもつ園ばかりである。

この3園を核におき、あとは時間が許す限り「新しい園を案内しよう」と事務局会議で構想がまとめ上げられた。幼稚園が増設期を迎える1965年に安部幼稚園として開設され、一貫して「遊びと労働」を軸とする保育を展開している安部幼稚園、プロジェクト委員会のある八王子から1958年創設のからまつ保育園、公立施設として川口児童館、みなみ野保育園と子育て相談センター（1997年）を訪問先と決め、9月12日夕刻、八王子京王プラザホテルに代表団を迎えたのである。

日本の保育を学びなおした1週間

諸事情から実際にまわる順序は「新から旧へ」となってしまったが、18日の代表団帰国までの4日間、実に精力的に園を訪問しまくったというのが実感である。沈団長はじめ7名の団員の方々は疲れを見せず意欲的であったが、途中、余さんが体調を崩されたのが残念であった。歓迎会を済ませた翌13日午前9時、ホテルを出発して最初に向かったからまつ保育園では、年中年長クラスの音楽演奏でお出迎え。上がり口には秋の草花が生けられ、細やかな心遣いをあちこちに見て取ることができた。昼食時に訪問先の紹介を兼ねて日本の幼児教育・保育の流れを概説した。それを皮切りに午後は八王子市立の施設を、14日は横浜の安部幼稚園と中華街にある小紅之会保育園（横浜保育室）を、16日に豊明幼稚園と二葉乳児院・保育園、17日にはお茶の水女子大学付属幼稚園を訪ねた。わが国128年の保育の歴史は彩り豊かで、案内した私自身が日本の保育を学び直した1週間でもあった。この訪問から代表団のメンバーは何を汲み取ってくれたのだろうか。

日本の保育について講義する筆者

二葉乳児院・保育園にて

上海宋慶齢基金会学前教育代表団が日本で受けとめたもの

代表団が帰国して1ヶ月後、上海から団員全員の個別執筆による『総結（まとめ）』の小冊子が届いた。代表団が日本の乳幼児施設・児童館・子育て相談センターの参観、関係者との交流で何を受けとめたのか？ 一部を抄訳して紹介したい。

団員中最年少（25歳）の中国福利会幼稚園教師、施雯さんは「我眼中的日本—孩子的自由成長—（私の眼に映った日本—子どもの自由な成長）」と題して次のように述べている。

「中日両国の間には異なった文化背景がありますが、これに照応して教育にも異なった所があります。研修期間、私たちは8箇所の幼児教育機構を訪問しました。私は、社会、学校、家庭における子どもの自由な成長という観点から感想をまとめたいと思います」と前置きして、感想を四項目に整理した。

［感想の一］ 子どもを尊重している

(1) 豊富な文化環境‥日本では人々は早い時期から子どもの読書を重視し、各地域に図書館を設け、図書館には幼児専用の活動室があり、年齢別に各種の図書が備えられている。

(2) ゆったりした自由な教育環境‥子どもたちは自身の自由意志に従って活動し、教師は始終活動の支持者、観察者の位置に居り、子どもたちの必要なときに適宜援助をする。

［感想の二］ 人と自然の協調的発展に留意している

(1) 訪問先のどの幼稚園でも環境の緑化を非常に重視している。

(2) 子どもたちは、幼稚園で楽しく生活し、興味のあるものを大事にし、園内で飼育している小動物と一緒に過ごし、大きな子どもは、その世話をしている。そのことにより、周囲の生物をいつくしむ事を学び、周囲の世界から多くのものを発見することを学んでいる。

(3) 教室で見受けた作品は、例外なく、どれも“無価之宝（コストのかかっていない宝物）”である。これらの作品はみな子どもの手で作られたもので、作品の原材料は子どもたちが身を置く自然環境から取得した物である。

［感想の三］ 終始一貫の教育理念

(1) 教師と子どもたちとの関係は親密な友だちのように感じられた。子どもに対して友人に対するように語りかけている。

(2) 子どもはみな自分の誕生日を大事にし、教師もまた1人1人の誕生日に関心を寄せ、誕生日行事の飾り付けが室内インテリアの重要な要素となっている。これは、子どもが自分と同様友だちの存在に関心をもつ契機となっている。

(3) 子どもの指導に当たって、教師は子ども自身の自発性を誘い出す方法をとっている。

(4) 子どもの創造力の強化と発展を重視している。

［感想の四］ 家庭環境に留意している

(1) 訪問先の乳幼児施設には、相談室や子育て支援センターが設置されており、教師たちは父母の心理的側面から困難な問題を解決している。

(2) 日本の子ども・家庭支援センターの教師は保健・心理・保育・児童管理分野の専門の知識をもって父母の指導にあたっている。

施雯さんは、概要このように感想をまとめた後、「日本研修で知った教育観念・方法を必ず今後の活動に活かしたいと思います。学習の終結は、思考の開始を意味します。私たちはどのようにして子どもの視角より世界を認識すればよいか？ どのようにして教育の中で人と自然の協調発展をより良く体現させればいいか？ 愛情をもってどのように子どもの中にとけ込めばいいか？ 教育者の位置にとどまらず、子どもの永遠の支持者、子どもの活動への参与者になりたいと思います」と結んでいる。

（文責 久保田博子）

近代百年の中国と日本

日本女子大学教授 久保田 文次

日本は長い間、中国の文明を吸収摂取することによって発展してきた。中国文明の伝来・摂取がなければ、日本文化は全く成立しえない。漢字はそのことを表すもっとも典型的な例であり、片仮名・平仮名のもとも漢字である。私の子供のころは、万世一系の天皇制こそ、日本の誇りだと教えられたものだが、これも漢字でなければ表記できない概念である。

ただ、近代においては、明治維新以降の日本の近代化は中国の改革派・革命派の人たちに高く評価され、中国からの留学生は日本を通じて、欧米の近代思潮などを学んで、自国の近代化を促進したのである。中国の革命指導者孫文、啓蒙思想家梁啓超、文豪魯迅や、蒋介石・周恩来・宋慶齢など、中国近現代史の舞台で活動した人物には、留学生や亡命者として日本に長期滞在した経験のある人が非常に多い。近代日本が中国に与えた積極的な影響は、現在の中国で使われている人民・共和・国家・憲法・政治・経済・社会・文化・政党・共産等の語彙にも現れている。これらの言葉は、明治の日本人が新しくつくった和製漢語か、中国古典の語彙に新解釈を施したものである。近代日本の影響を完全に排除したならば、現在の中国の新聞や書物は成り立たなくなるに違いない。

このように、近代化の模範を示し、漢字表現に新しい生命を吹き込んだ日本を、孫文達は評価した。中国の進歩的な人々は、日露戦争における日本の勝利を専制国に対する立憲国の勝利、欧米に対するアジアの勝利として評価し、その刺激をもって自国の革新を進めようとしたのであった。孫文は1924年の最後の訪日の際、神戸における「大アジア主義」演説において、日露戦争における日本の勝利に対する感動を思い起こし、日本が欧米の侵略的・強圧的な「覇道」を学ぶのではなく、東洋の伝統的な理想であった「王道」に則った対アジア外交を展開するように訴えた。

しかし、その後の日本の対中国政策は、明治維新以降の近代化を評価した孫文等の期待を裏切るものとなった。日本は中国に対して、帝国主義的外交を推進し、1930年代には遂に全面戦争を開始した。侵略戦争や植民地支配をしたのは日本だけではなく、イギリス・フランス・アメリカ・ソ連もみな同様である。しかし、日本・ドイツのそれは、規模が大きく、期間が長く、時期が新しいので、被害の記憶がまだ生々しいことから、より厳しい批判にさらされる。日本人はこうした歴史・現状を直視し認識する必要があると思う。また、中国の人々にも日本の近代化が中国に積極的な影響を与えたことを始め、現在、日本人の大多数は侵略戦争を批判・反省していることを、理解してもらいたい。

両国は地理的・歴史的・文化的に関係が深い上に、近年は中国の改革開放の発展によって、経済的な相互依存がますます強まり、日本経済における中国の比重はますます高まっている。妥当な歴史認識・現実認識を基礎として、両国の良好な関係の維持・発展をはかることが必要である。

緊急支援

豪雨で倒壊した流井郷主良小学校の再建

河北省易県教育局から主良小学校の再建支援の要請がありました。冬が来る前に、子どもたちが学校に通学できるよう、緊急支援として取り組みます。ご協力をお願いいたします。

再建申請書

わが校は河北省易県、県の中心から北側に10キロメートル離れた太行山の裾野にあり、一年生から六年生までの完全小学校です。現在、学校に教師は8人、生徒は186人です。

わが校は1980年代に建てられましたが、資金が乏しく、校舎を維持することが出来ず、屋根と壁が壊れてしまいました。今年は雨が多く、教室の地盤が沈んで壁が斜めに傾き、8月11日の大雨で、1棟の教室が倒れました。そのため、4クラスの生徒たちが教室に入ることができず、借りた民家で勉強を続けるしかありませんでした。

なるべく早く教室を建て直し、学校を元のように戻すために、村のリーダーたちが積極的な方法を考えて、資金と材料を工面しました。村民たちも相次いでお金を寄付したり、物を寄付したり、ボランティアで力を出しました。

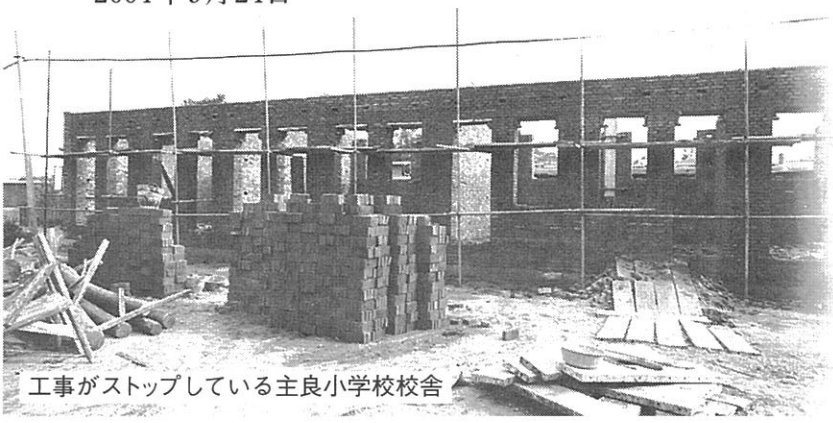
技術者の見積もりによると、建て直すには資金が122,340元必要です。村で、資金なしで解決できる事は、レンガと砂と石と人件費です。レンガは10,000元、砂は440元、石は1,610元、人件費は15,000元です。他の材料費は95,290元です。

全村の村民たちが協力して、工面したお金は全部で57,000元です。工事は9月1日から始めましたが、主な建築である屋根が出来ていないのに、9月19日までに集まったお金を全部使い切ってしまいました。引き続き工事するためには、コンクリート、鉄骨、屋根の防水保温材料、ドアと窓の材料と暖房設備、電線コードと照明設備の資金がなく、今工事はストップしています。もし工事が予定通りに終わらなければ、冬が来て、工事は出来なくなります。そうすると100名以上の生徒たちは、民家で勉強を続けるしかないのです。しかし、民家では生徒たちの暖房問題が解決できず、冬の間、教師と生徒たちが寒さとたたかいながら学ぶことになります。他に、実験しながら学ぶ課程などの教育活動が出来なくなり、学校の教育課程を修了できません。

ですから、宋慶齢基金会、日本の友人たちにお願いします。なるべくこの難関を乗り越えて、生徒たちが出来るだけ早く学校にもどれるように、わが校に人民元38,290元（日本円：約52万円）の資金を援助して頂きたいのです。

2004年9月24日

易県教育局
流井郷主良村委員会
流井郷主良小学校



工事がストップしている主良小学校校舎

振込用紙のカンパ欄に
金額をご記入の上、
ご寄付をお願いします。

第7次
訪中団

河北省・吉林省教育支援現地視察

6月27日～7月3日　河北省易県から吉林省永吉県へ

【27日】 連絡部の呉存瑜部長・劉穎さんとエプシュタイン顧問を訪問。

【28日】基金部 鄧紅沁主任の案内で易県へ向かった。最初に訪問した**白馬郷の白馬中学**は、老朽化した平屋校舎に生徒276名の、何もない中学だった。「県政府から出る教材費は、用紙とチョークを買うと終わりです。お見せできるような図書室はありません」と宋恵増校長が静かな笑顔で語った。6月に卒業したばかりの柳田奨学金受給生、田穎さんが駆けつけてくれた。

流井郷に入り、4年前の開園時、JCCが屋内外の遊具など25品目を寄贈した**中心幼児園**を訪ねた。子どもたちの汗でぬれた頭髪の下には大きな瞳が輝いていた。3歳～6歳の園児93名、園長の他保育員1名、教師3名。園費は月額30元（約450円）、入園率100%。古い事務所を改造した園舎。もっと整備したいと話していた。

流井中学は、9年制義務教育普及を担う郷の重点校である。生徒数640名（内女子210名）職員数44名。平屋の老朽校舎であるが、パソコンをぎっしり配置した意欲的な教室を見た。教室を改造した寄宿舎と食堂の脇にあった給水設備（水塔）が壊れて使えなくなっていた。新学年開始の9月までには新設しなければならないが資金がなくて困っていると聞いて、即刻支援を決めてしまった。**流井郷主良小学校**は、生徒数179名（内女子103名）と学前班に職員8名の小規模校である。児童の学費は年額184元。校舎の老朽化が進み、3年生の教室は屋根が崩れかけて危険なので、民家を借りて授業をしていた。危険教室は現在修築中であるが、レンガの芯にする鉄骨の購入資金（5万元／70万円）がなくて作業はストップしているとのことであった。

8月中旬、新設された給水塔

最後に、再度**白馬郷**に戻り、**中心東白馬完全小学校**を訪問した。全校8クラスで児童数256名（内女子130名）、職員12名。古びた教室で机も椅子もひどい壊れ方であった。北京で不要になった机と椅子をもらってきて不足を補っているが、まだ絶対数が足りない、ということだった。

【29日】午前中、易県教育局副局長肖鵬さん、担当の高建勇さんを中心に当地教育支援の打ち合わせを行った。会議の要点は、第2期奨学金協定書（04-06／小学生300名、女子中学生50名）、柳田奨励金、机と椅子の不足、危険老朽校舎の改修など。4年前初めてこの地を訪れた時は、日本軍侵略の傷跡に緊張したが、今回は心和むものを覚えた。

午後北京にもどり、日本大使館に中屋弘貴書記官を訪ね、「草の根無償」資金申請関係の相談にのって頂き、夕方、基金部の杜愛平さん同伴で吉林行きの夜行列車に乗った。

【30日】早朝、**永吉第7中学**を訪問。生徒数は約1,300名で、半数が山村出身で寄宿舎生活をしている。寄宿生は、月額150元の食費・300元の寄宿料の内年額3,000元を負担しなければなら

ない。通学生の学費は年額1,000元（約15,000円）この中学の卒業生の80％は、県の重点高級中学（高校）に進学し、25％は重点大學に進学する。JCCは、前校長から農村中学の苦境を訴えられて、2002年度から生徒50名に1人年額3,000円の奨学金を給付している。今回は、寄宿舎生活をしている5名の受給生と会い、2名の女生徒の家庭を訪問した。がたがた道を小1時間車で走って辿り着いた呂さんの家には学校に行けない妹が居た。2人を学校に行かせるのは無理だという。家族の年収は3,000元である。

【7月1日】長春空港から北京に戻る。叱利群新副主席に初対面。

【2日】午後、日中共同会議：主要テーマは「寧夏教育支援の継続、特に女性教師研修の共同開催について」李寧秘書長、李希奎基金部部長、劉頴さん参加。夜、兪貴麟副主席をお見舞いした。

【3日】午前、黄華前主席・何理良夫人を訪問。午後、帰国。

（文責：久保田博子、通訳・撮影：井岡今日子）

“寧夏教育支援10周年記念式典”が行われた！

9月12日、寧夏回族自治区の西吉和平中学で1,000人の生徒学生が参加して、この地としては最も盛大な記念式典が催された。寧夏回族自治区南部山村に対する日本人の教育支援は、1993年1月、宋慶齢女史生誕100周年記念行事に招かれた宋慶齢日本基金会役員に対して中国基金会の黄華主席から、中国西部地域の貧困脱却運動への協力の一環として要請されたものである。日本基金会は、まず子どもたちを通学させるために小学生に対する就学支援奨学金給付を皮切りに、当地の伝統的風習を跳ねのけて女性が教育を受け、社会的成長を目指せるように女児の就学支援に力点を置き、女性教師養成奨学金を設け、支援者に里親の継続支援をお願いした。この教育支援を飛躍的に発展させたのが、330-A地区（東京）ライオンズクラブの協力だった。小学校5校、中学校1校をそれぞれ鉄筋コンクリート2～3階建校舎で建設支援した。また、東京代々木ライオンズクラブは、単独で同様の小学校校舎を建設支援した。その上、ライオンズクラブのみなさんは、総額一千数百万円に達する小中学生就学支援、女性教師養成奨学金を拠出している。式典には、新保・田中・中江 三理事ほか23名が参加した。

女性教師養成の奨学生と代々木ライオンズクラブの皆さん

チャリティ映画会 53万円の収益

6月12日、中国映画「北京ヴァイオリン」の上映会を開催いたしました。

多数の皆さまのご協力によって、八王子市芸術文化会館（いちょうホール・大ホール）での2回上映は、900人の観客で大盛況でした。映画を通して、中国の社会、親子の愛情、美しい音楽などに触れ、涙と感動の映画会になりました。

おかげさまで、53万円の収益金がありました。ご協力、本当にありがとうございました。

このお金は、日本と中国の草の根の友好のために、都市に比べ著しく経済発展の遅れている農山村・河北省の僻地で、1年間1,500円の奨学金を待っている小学校の子ども達に送らせていただきます。

JCC活動日誌　2004年4月4日～2004年10月30日

4月 8日　上海宋慶齢基金会学前教育代表団の参観依頼状を発送

4月10日　第4回JCC中国講座：久保田文次氏「近代百年の日本と中国」

5月 7日　上海宋慶齢基金会学前教育代表団第2回受け入れ準備会：幼児教育支援交流プロジェクトとしての確認／代表団の経費負担について

5月20日　八王子国際交流情報交換会に参加（市役所）「国際理解教育について」

5月22日　第17回事務局会議：〈北京ヴァイオリン〉上映会について

5月27日　新保理事、東京代々木LCで寧夏教育支援について報告

5月30日　八王子テレメディアで〈北京ヴァイオリン〉チャリティー上映会の宣伝

6月12日　〈北京ヴァイオリン〉チャリティー上映会（八王子市芸術文化会館）：八王子市及び市教育委員会後援／いちょうホールふれあい財団助成

6月　フィリピン宋慶齢基金会成立

6月19日　第18回事務局会議：河北省易県教育支援第2期協定書等

6月27日～7月3日　第7次訪中団派遣：河北省易県・吉林省永吉県における教育支援現地視察及び中国宋慶齢基金会との意見交換（久保田、井岡）

7月 3日　真鶴共生舎（高良真木主宰）訪問

7月22日～28日　第8次訪中団派遣：2004上海国際少年児童芸術文化祭参加、〈井岡今日子写真展「日本の子どもの春夏秋冬」／上海少年宮7/22-8/5〉後援、杭州訪問（川崎、井岡、磯貝、佐藤、吉村、中島、野田、宮川）

7月28日～8月2日　貴州省凱里市・恵水県における母子保健・教育支援現地視察（川崎、井岡）

8月 3日　上海宋慶齢基金会学前教育代表団第3回受け入れ準備会

8月17日～21日　第9次訪中：寧夏南部山地女性教師夏季研修講師（新保）として参加

8月21日　第19回事務局会議：学前教育代表団第4回受け入れ準備会、第7次訪中報告等

9月 8日　330-A地区LC奨学金81万円送金：寧夏回族自治区小中学生190名、代々木LC奨学金36万円送金：同自治区師範専科学校生30名、京友会辞典寄贈10万円送金

9月10日～14日　第10次訪中：東京代々木LC代表団（田中、中江等7名）、寧夏教育支援10周年記念式典参加及び現地視察・交流

9月10日～18日　新保教授・早稲田大学学生等18名、寧夏回族自治区で教育支援交流

9月12日～18日　上海宋慶齢基金会学前教育代表団（沈海平団長）来日：東京・横浜の乳幼児・少年児童施設参観、関係者と交流

9月16日　図書セット寄贈（河北省易県小中学校5校）代金40万円、柳田奨励金5万円送金

9月22日～28日　第11次訪中：河北省易県にて図書セット寄贈、柳田奨励金贈呈など

9月25日　第20回事務局会議：学前教育代表団在日活動をめぐって

10月16日　第21回事務局会議：第6回理事会議案など

10月18日　上海学前教育代表団訪日研修報告『総結』届く

10月22日　奨学金90万円送金：河北省易県小中学生350名、吉林省永吉県中学生50名、貴州省凱里市小学生100名

10月22日　河北省易県主良小学校倒壊教室再建支援に52万円送金

10月24日　第6回理事会：事業経過報告及び来年度への提案

11月 4日　“為了明天”第8号発行

JCC中国講座 第5回

中国における人間開発と貧困問題

講師：川崎 高志さん
（創価大学助教授）

1980年代以来の中国における貧困解消の取り組みを、人間開発の視点からみていきます。内陸部の貧困地域の状況を現地視察の写真や映像を使用して、詳しく紹介します。

日時：11月13日（土）14～16時

場所：八王子市クリエイトホール11F 第7学習室
JR八王子駅北口2分（ヨドバシカメラ近く）

参加費：500円（先着36名）

編集後記

超発展の上海・北京等に比べ、辺地山間部のあまりの格差に首を傾げながらも、現地を訪れ、易県流井中学校の庭に新設の給水塔を仰ぎ、迸り出る冷たい水を手に受けると、素朴な感動に胸が熱くなった。「水を飲む時、井戸を掘った人を忘れない」という言葉を思い出し、ささやかな友情の種を蒔きつづけたいと思う。今も、余震が続く新潟県中越の被災地を思い、辛い秋であるが、元気ですごしたい。（三浦）

「為了明天」No.8
2004年11月4日発行
題字：周 肖
編集：三浦・井上
発行者：NPO法人宋慶齢基金会 日中共同プロジェクト委員会
久保田博子
〒192-0904 東京都八王子市子安町1-43-6-206
TEL/FAX0426-46-4210
郵便振替：00170-2-152423
UFJ銀行八王子支店（普通）4731623